白鷗大学教育学部論集
2015，9（2），357－380

原著論文

「自尊感情」ではなく「自尊心」が “Self-esteem” の訳として適切な理由

― Morris Rosenberg が自尊心研究で言いたかったこと ―

仁　平　義　明[1]

はじめに

日本でself-esteemの研究が本格的に行われるようになった1970年代、訳語は「自尊心」だった。ところが、近年は「自尊感情」という表現が多数派に変わった。とくに現在の教育界、臨床界は「自尊感情」一本槍のような状況である。文部科学省も、たとえば『平成19年度文部科学白書』では「自尊感情」を使っている。近年の心理学のテキストや心理学辞典、学会発表のタイトルも状況は同様である。

そうした記述の多くは、self-esteem 研究の先駆者 Morris Rosenberg（1922–1992）の名前を引用しながら「自尊感情」という訳語をあてている。しかし、「自尊感情」という訳は、彼の『*Society and the adolescent self-image*』（Rosenberg, 1965）にある定義をじゅうぶんに参照したとは考えにくい。

彼は、Self-esteem という概念を、基本的には自分自身に対する「態度」、「評価」、「信念」だと定義している（Rosenberg，1965）。本論文では、「自尊感情」という表現は、じっさいに「感情」の側面だけを指している場合は別として、本来多面的な self-esteem 概念の訳語として使用するのであ

[1] 白鷗大学教育学部
[1] E-mail：nihei@fc.hakuoh.ac.jp

れば適切ではない用法であり、より包括的な「自尊心」の方がふさわしい表現であることを明確にしていく。

「認識」には「感情」も伴うから「自尊感情」でかまわないのだと主張することもできるかもしれない。しかし、それでは self-esteem という概念にある重要な多くの側面を無視することになるだろう。

本論の第一の目的は、self-esteem という概念について、Rosenberg自身やその前後の時期の人々の考えをあらためて紹介し、「自尊感情」ではなく「自尊心」の方が適切な表現だということを示すことである。

第二の目的は、彼が自らの self-esteem 研究で主張したかったのは結局どのようなことだったかを整理することである。

第三の目的は、これが本論の最も重要な目的になるが、self-esteem 概念の訳語を変えることで、正確にいえば元に戻すことで、self-esteem に問題を持つ人々への介入に関わる考え方を変えることにある。この論文で「自尊心」か「自尊感情」かを論じるのは、単に表現の正確さを求めるためではない。Self-esteem という概念をどう理解するかは、それに問題が生じたときの対応を決定する。Self-esteem が低い子ども・人への介入が必要なとき、「感情」を変容させるだけの介入であれば感情のコントロール、感情のマネージメントの問題になる。しかし、self-esteem が、本来、Rosenberg が考えたように、感情よりは根本的な自己への「態度」、自己についての「信念」であるのなら、介入には、より困難な「態度変容」、「信念の変容」のための理論と方法が必要になる。

そのためにも、Rosenbergが彼の研究結果から最も強調したかったこと、つまり、子どもの自尊心の形成には「親の関心」「他者からの関心」が必要だという事実が意味を持ってくる。だから本論の主旨は、とくに子どもに関わりの深い臨床関係者、教育関係者に理解をしてほしい。

Ⅰ　初期の二大「自尊心」研究

自尊心の初期の実証的研究で、二大研究といえるものがある。Rosenberg

の研究（1965）とCoopersmithの研究（1967）である。どちらもアメリカ研究者によってほとんど同時期に単行本として公表された。扱われた要因の幅広さからいっても規模からいっても、自尊心研究の基本的な問題は、二つの研究が初期のうちに検討してしまったともいえる。

心理学の国際文献データベース「PsycINFO」で、キイワード「self-esteem」×「Rosenberg」の積集合と「self-esteem」×「Coopersmith」の積集合を検索すると、前者は 8,098件、後者は872件ヒットする（2015年９月12日現在）。この結果からも、Rosenbergの影響がいかに大きかったかを推し量ることができる。

Rosenbergがこれほど引用される背景には、彼が自尊心研究の先駆者として優れた内容の研究（『*Society and the adolescent self-image*』は、1963年、まだ原稿の段階だったのにもかかわらず American Association for the Advancement of Science の“Socio-Psychological Prize”を受賞した）を残したことのほかに、作成した Self-Esteem 尺度が10項目で、センテンスも短く、きわめて実施しやすいものだったこと、表現も平易で広い年齢範囲の対象に適用できることが関係しているだろう。一方、“Coopersmith Self-Esteem Inventory”（1967）は58項目だった。

しかし、Coopersmithの研究は、『*Scientific American*』誌の日本版『サイエンス』1972年の心理学特集号で「自尊心の形成と家庭環境（STUDIES IN SELF-ESTEEM）」（岡本奎六訳）として紹介され、実験法による自尊心研究を日本でポピュラーなものにするのに貢献した。

現在でも、自尊心の問題は日本の心理学者の間で研究され続けているが、近年は「自尊感情」という用語の方が主流になっている。たとえば、日本心理学会大会第79回（2015年）でタイトルに「自尊感情」を含む発表は７件、「自尊心」３件である。同じように日本パーソナリティ心理学会第24回大会（2015年）でタイトルに「自尊感情」を含む発表は６件、「自尊心」は２件である。その多くは、「ローゼンバーグの Self-Esteem 尺度」を使った研究である。

1．Rosenbergの自尊心の定義

Rosenbergは社会学者である。Maryland大学ウェブサイトのRosenbergに関するページ（http://www.bsos.umd.edu.socy/Research/rosenberg.htm；September 15，2015）には、彼がこの大学で1975年から亡くなる1992年まで社会学の教授を務めていたと書かれている。彼の自尊心研究で扱われた要因も、社会階層、父親の職業、宗教、人種、差別経験など、社会学的な視点に立ったものが少なくない。1965年の著書のタイトルも『社会と青年の自己イメージ（***Society** and the adolescent self-image*）』である。

この本は、日本の文献で「ローゼンバーグの Self-Esteem 尺度」の原典としてだけ引用されることが多い。しかし、彼の研究で最も重要な貢献は、子どもの自尊心の源は一貫して「**子どもへの親の関心**」にあることを、多くのデータから明確に示した点にある。

本論文のもう一つの目的は、彼が自尊心研究で最も言いたかった「親の関心」の重要性をあらためて確認することである。

⑴　James（1980）の定義

自尊心という用語を歴史的に概観するのは本論文の目的ではないが、Rosenbergによる定義をみていく前に、アメリカ心理学の祖の一人Williams Jamesによる self-esteem の定義（James, 1890）を紹介しておく。Rosenberg（1965）は James（1890）を引用しており、彼の定義にJamesの考えが反映されているからである：

> The concept of **self-esteem** generally refers to a person's **evaluation** of, or **attitude** toward, him- or herself.
>
> 「自尊心という概念は、人の自分自身についての**評価**、あるいは自分自身に対する**態度**を意味している。」

このように、Jamesの定義では、self-esteem は「評価」、「態度」である。この考え方は、ほとんどそのまま Rosenberg に受け継がれた。

⑵　Rosenberg（1965）の定義

Rosenberg（1965）による self-esteem の定義で、まず重要なのは『*Society and the adolescent self-image*』の冒頭部分で、自分の研究が「自己への**態度**（self-attitude）の研究」だとしていることである。ここからも、彼の self-esteem という概念の中核が「感情」ではなく「態度」であることが明らかである：

> The present report sets forth the results of a study of **self-attitudes** in the stage of later adolescence, …（p.3）
>
> 「本報告では、青年期後期における**自己への態度**についての研究結果を明らかにしたいと思う」

別な箇所では、「自己への態度」の構成要素は、自己に対する「**意見**」（opinions）、「**態度**」（attitudes）および「**信念**」（beliefs）であるとしている：

> …the social psychology of **self-attitude**s: the study of the social factors determining **opinions, attitudes, and beliefs about the self**.（p.15）
>
> 「…**自己への態度**についての社会心理学：自己についての**意見**、**態度**、および**信念**に影響するさまざまな社会的な要因を扱った研究」

次の一節は、self-esteem の意味をさらに明細化している：

> “But our main concern, or, to use Lazarsfeld’s phrase, our “pivotal variable,” will be **self-esteem**. In other words, what is **the direction of the self-attitude**?”
>
> 「しかし、われわれの主たる関心、Lazarsfeldの表現を借りれば、われわれの「中核的変数」といえるものは自尊心だろう。言い方を変えれば、**自己への態度の方向性**とはどんなものだろうか？」

自己への「**態度の方向性**（the direction of the self-attitude）」が「自尊心（self-esteem）」である。だから、彼は、後に述べるように簡潔に「自尊心は自分自身への肯定的なあるいは否定的な**orientation**（志向性・態度）」であるとして、自己への態度の方向性を自尊心だとしている。

⑶ Rosenberg（1979）の定義

彼は、自尊心について別な著書『*Conceiving the self*』を1979年に刊行した。その中では、self-esteemについてこう述べている：

> In the present discussion, **self-esteem** signifies a positive or negative **orientation*** toward an object. When we characterize a person as having high self-esteem, we are not referring to feeling of superiority, in the sense of arrogance, conceit, contempt for others, overweening pride; we mean, rather, that he has **self-respect**, consider himself a person of worth. Appreciating his own merits, he nonetheless recognizes his faults, faults that he hopes and expects to overcome. The person with high self-esteem has *philotimo*, not *hubris*; he does not necessarily consider himself better than most others but neither does he consider himself worse. The term “low self-esteem” does not suffer from this dual connotation. It means that the individual lacks respect for himself, consider himself unworthy, inadequate, or otherwise seriously deficient as a person.（p.54）
>
> 「ここでは、**自尊心**は、対象としての自分自身に対する肯定的なあるいは否定的な**態度**を意味している。その人が高い自尊心の持ち主だというときには、優越感、傲慢さ、うぬぼれ、他者の軽蔑、尊大なプライドなどを持っていることを意味しているのではない。**自尊心が高い**というのは、その人が**自分自身に敬意を持っていること**、**自分には何らかの意味では価値があると思っていること**である。自分の長所をわかっている一方で、直す必要がある自分の欠点もよく知っている。自尊

心の高い人は“*hubris*”（ギリシャ語：尊大さ）ではなく、“*philotimo*”（自尊心・名誉）を持っている。自尊心の高い人は、自分が他のたいていの人たちより優れていると考えるわけではないし、自分が劣ると考えるわけでもない。“低い自尊心”という用語は、この優－劣という二つの意味には関係がない。**自尊心が低い**というのは、その人が**自分自身に対する敬意を持っていないこと、自分には何の価値もない、無力な、あるいは自分を人間として重大な欠陥があると考えること**を意味している。

* orientation は「志向性」でもよいかもしれないが、辞書上は「態度」の意味がある。

自尊心の意味は、他者との優－劣比較ではなく「自分を尊重する心」、「自分を大切にする心」であることが、この記述で明確に示されている。

⑷　Maryland大学のウェブサイト「Rosenbergのページ」での定義

先に紹介したようにRosenbergはメリーランド大学に長年勤務した。大学のウェブサイトにあるRosenbergに関するページ（http://www.bsos.umd.edu.socy/Research/rosenberg.htm）には、“**SELF-ESTEEM**：WHAT IS IT?”というタイトルで次のような定義がある：

Self-esteem is a positive or negative **orientation** toward oneself, an overall **evaluation** of one's worth or value. People are motivated to have high self-esteem, and having it indicates positive self-regard, not egotism. Self-esteem is only one component of the self-concept, which Rosenberg defines as “totality of the individual's thoughts and feelings with reference to himself as an object.”

「**自尊心**は、自分自身に対する肯定的あるいは否定的な**態度**、自分の有用性や価値の総体の**評価**である。人は高い自尊心を持とうと動機づけられており、高い自尊心を持っているということは自分を肯定的に見ていることを意味するのであって、うぬぼれや自負心を意味するのではない。ローゼンバーグは自己概念を“自分を対象として見たとき

の、思考や感情の総体”だとしているが、自尊心はその一部にすぎない。」

Self-esteem（自尊心）は、自分を肯定的に評価し、自分に何らかの有用性・価値を見出し、尊重する態度だと定義されている。

結論としていえるのは、感情は、彼の self-esteem の定義には出てこないことである。彼の「自己概念（自己についての考え方）」（self-concept）には感情も含まれるが、self-esteem は自己概念と同一ではなく、自己概念を構成する要素の一つである。

２．Rosenbergの自尊心尺度

彼の自尊心尺度の10項目を見ていけば、自尊心は「信念」、「態度」、「評価」など幅広いものを含んだ概念であり、これを「感情」という働きだけに押し込めるのにはどうしても無理がある。

ローゼンバーグは、ランダムに選択したニューヨーク州の10校のハイスクールの生徒、10歳～18歳の5,024人を対象にして、自尊心が影響する要因と自尊心に影響すると考えられる要因について調査を行った。

自尊心の得点化と「高・中・低（High-Medium-Low）」の分類

研究では、後に“Rosenberg Self-Esteem Scale”と呼ばれるようになった10の記述項目からなる尺度が使用された。反応の構えが固定されないように、半分の５項目は自己を尊重する内容（以下、自尊的内容）の記述、５項目は自己を否定するような内容（以下、非自尊的内容）の記述になっている（表１）。

評定は“strongly agree－agree－disagree－strongly disagree”の４段階。意図的に「肯定－否定」の強制選択にしたもので、中間段階の評定がない。Rosenbergは、10項目の「記述項目」に対する「肯定-否定」反応を複雑に組み合わせることで６つの「尺度項目得点（Scale Item Score）」を決定し（表２参照）、さらに尺度項目得点に応じて自尊心水準を「高・中・低群」に分ける手続きをとった。

表１．Rosenbergの自尊心尺度の項目（参考訳）

１．I feel that I'm a person of worth, at least on an equal plane with others. ほかの人のように、私にも何か一つくらいは長所があると思う。
２．I feel that I have a number of good qualities. 私って、けっこういいところもあるなと思う。
３．All in all, I am inclined to feel that I am a failure.* 何をやってもうまくいかないと思ってしまうことが多い。*
４．I am able to do things as well as most of others. たいていのことでは、人並みにはうまくやっていける。
５．I feel do not have much to be proud of.* 人に自慢できるようなことといっても、あまり無いなあと思う。*
６．I take a positive attitude toward myself. 自分自身をポジティブにみることができる。
７．On the whole, I am satisfied with myself. まあまあ、自分に満足している。
８．I wish I could have more respect for myself.* 自分がもっといい人間だったらいいのになあと思う。*
９．I certainly feel useless at times.* ときどき、自分は何の役にも立たない人間だと思ってしまう。*
10．At times I think I am no good at all.* 自分はどうしようもないダメな人間だと思うことがある。

*の５項目は、低自尊心項目

【注１】
University of Maryland のウェブサイトにある「Rosenberg」のページには、現在“Rosenberg Self-Esteem Scale”は許諾なしにだれでも使用してかまわないという説明がある。ただ，遺族は彼の尺度を用いた研究があったことを知りたいと思っているので、尺度を使用した場合は「モリス・ローゼンバーグ財団」に結果を知らせてほしいとの要望が書かれている。

【注２】
項目８の「respect」の記述を「自分を尊敬…」のように訳すのは、日本語の自然な語用としては違和感が生じる。「…できたらいいのに」という非現実話法のような表現のせいもあってか、「尊敬」の訳で因子分析を行うと、この項目だけに負荷量の大きな因子が出ることを経験している。

表２．自尊心の「尺度項目Ⅰ～Ⅵ」のスコアリング法（Rosenberg, 1965）

尺度項目	得点対象記述項目	得点方法
Ⅰ	１・２・３*	「高自尊心項目 1･2」に対する否定反応（strongly disagree または disagre）と「低自尊心項目 3*」に対する肯定反応（strongly agree または agree）が２項目以上あれば得点は「1」、1 項目以下なら「0」。
Ⅱ	４・５*	「高自尊心項目 4」に対する否定（strongly disagree または disagree）と「低自尊心項目 5*」に対する肯定（strongly agree または agree）が、2 項目中 1 項目以上あれば得点は「1」、0 項目なら「0」。
Ⅲ	6	「高自尊心項目 6」に対して否定なら､得点は「1」。
Ⅳ	7	「高自尊心項目 7」に対して否定なら､得点は「1」。
Ⅴ	8*	「低自尊心項目 8*」に肯定なら、得点は「1」。
Ⅵ	9*・10*	「低自尊心項目 9*・10 *」の 1 項目以上に肯定なら、得点は「1」。

【注 1】* の項目は、低自尊心項目。
【注 2】Rosenberg の「尺度項目得点」では、高自尊心項目の方が逆転項目になっている。したがって「尺度項目得点」が高いほど、自尊心水準は低いことになる。

「尺度項目得点」１点に割り振られる「自尊心項目」数は、1 項目の場合（自尊心項目６、７、８それぞれが１点）、２項目の場合（自尊心項目４・５と９・10がそれぞれ１点）、３項目の場合（自尊心項目１・２・３で１点）と、３通りに分かれている（表２）。結果的には「尺度項目得点」の範囲は「０～６点」になる。10項目の「自尊心項目」それぞれの評定得点と、Rosenbergがいう「尺度項目得点」も同じ「項目」の得点ではあるけれど、別なものである。この得点法は、わかりにくい。

自尊心水準の「高・中・低」については、Rosenbergは「尺度項目得点」が「０～１」の範囲を自尊心が「高い（High)」として分類した。「２～３」は「中程度（Medium)」、「４～６」は「低い（Low)」自尊心水準だとされた。尺度項目得点が低いほど、自尊心水準は高い。この３分法は、結果のところに説明なしに出てくる。尺度項目得点と自尊心分類の関係は、彼

の別な論文（Rosenberg, 1962）の記述をつきあわせるとわかる。

現在は、Rosenberg尺度でこのような面倒な分類手続きがとられることはない。後の多くの研究は、「どちらともいえない」の中間段階を加えて５段階評定にした項目得点について因子分析を行い、さらに項目得点の内的整合性（クロンバックのα）からはRosenberg尺度を単一次元尺度として扱ってもほとんど問題はないことを確認している。その結果、10項目の得点の総和が自尊心水準の指標として使われることが多くなった。

RosenbergはGuttman scaleなど尺度構成には通暁しており、尺度の信頼性や単一次元性についても検討を行って、その結果、尺度は基本的に一次元尺度だと考えてよいとしている（Reproducibility=93％；Scalability（items）＝73％；Scalability（individuals）＝72%）。

現在、Maryland 大学ウェブサイトの社会学研究室のページにある“The Rosenberg Self-Esteem”の解説では、原採点法とは異なり、“strongly agree － agree － disagree － strongly disagree”の４段階評定（０・１・２・３）で、低自尊心項目（３，５，８，９，10）の方を逆転し、10項目総和を求め30点をMaxにした採点法がとられている。しかし、Rosenberg の原法は、意図的に中間段階を無くすことで“agree”と“disagree”間の距離を大きくして、肯定－否定の強制選択をさせて処理を行うようにしたものである。したがってこの評定値に基づいて因子分析を行うことが適切かどうかは、疑問である。

３．Coopersmith（1967）の自尊心の定義

Rosenberg と並んで初期の自尊心研究を牽引した心理学者 Coopersmith（1967）は、self-esteemを次のように定義している：

> By **self-esteem** we refer to the **evaluation** which the individual makes and customarily maintains with regard to himself: it expresses an **attitude** of approval or disapproval, and indicates the extent to which the individual **believes** himself to be capable, significant,

successful, and worthy. In short, self-esteem is a personal judgement of worthiness that is expressed in the attitudes the individual holds toward himself. （pp. 4–5）

「**自尊心**とは、人が自分自身について下し、持ち続ける**評価**のことである。それは、是認あるいは否認の**態度**というかたちをとり、その人が自分は何かができる、何らかの意味を持った、何かに成功する、何らかの価値を持った存在であると**信じる**程度を示している。要するに、自尊心は人が自分自身に対して持つ**態度**にあらわれる、尊敬に値するという**判断**である。」

Coopersmithの定義も、Rosenbergと同様に「評価」「態度」「判断」である。やはり、「感情」を self-esteem 第一義的な要素にはしていない。

それなのに、なぜ日本の文献はRosenberg や Coopersmithの考え方に依拠しているとして著作を引用しながら、self-esteemを「自尊感情」と訳すことが近年になってから多くなったのだろうか。

II　日本での「自尊感情」の使用

日本で「自尊感情」という用語が、いつ・どこで・どのくらい採用されていったかを、いちいち列挙してカウントするのは、建設的な作業ではない。

しかし、日本において自尊感情という用語が self-esteem の訳語として普及する上で影響があった二、三の要因について考察しておこう。

一つは、平凡社の『心理学辞典』の初版である。

平凡社の『心理学辞典』（初版）は、1957年に刊行され、長い間、日本で唯一の心理学の大事典であり続けた。この事典には“self-esteem”の項目も索引語もなかったが、“self-feeling”（自己感情）と「自尊的情操」が索引語として存在していた。このことは「自尊感情」という用語が使用される遠因になったかもしれない。

しかし、最大の要因だと推測されるのは、一般的に使いやすい「心理尺度集」にある表現が「自尊感情尺度」だったことである。これ以前にも「自尊感情」の用例はあるが、2001年に刊行された『心理測定尺度集Ⅰ－人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』（山本編，2001）には“Rosenberg Self-Esteem Scale”を翻訳した「自尊感情尺度」が紹介されている（pp. 29–31）。この尺度集の記述が依拠した、山本・松井・山成（1982）の論文では“Self Esteem Scale”は原語のまま使用されていて「自尊感情」という訳語は使用されていない。しかし、文中では「自己評価を測定する尺度として、自己全体への感情的評価を測っているRosenberg（1965）のSelf Esteem Scale」と書いていて、すでに“Self Esteem Scale”を「感情的評価」を測定する尺度だとしている。また、この研究では、回答は原尺度の４段階の強制選択方式から、中間的評価を加えた５件法に変更している。

もし『心理測定尺度集Ⅰ』にある日本語訳を使用して研究を行おうとすると、「自尊感情尺度」以外の表現は一般的に使いにくい。日本で「自尊心」ではなく「自尊感情」の用語が多くなったのは、ここにも一つの要因があると推測される。

ただし、山本ら（1982）を引用して、この翻訳版を使いながら、「自尊心尺度」としている研究の例（長谷川・相馬・木村、清水，2015）もある。

また、比較的新しい心理学辞典で『APA 心理学大辞典』（繁桝・四本監修，2013）は、見出し項目に「自尊心」を使用している。

Ⅲ　Rosenberg（1965）が自尊心について言いたかったこと
－自尊心と連関がある要因－

1）要因の標準化

Rosenberg は、自尊心に影響を与え、それを形成する要因と自尊心が影響を与える要因の両方について検討を行った。自尊心の独立変数と従属変数の研究である。しかし彼は、自尊心を形成する要因は何なのかの方に関心が強く、より多くのページを割いている。検討された形成要因は、図１にあげる要因である。要因と自尊心水準との連関は、すべてカイ二乗検定によって有意性の確認がされている。

また、単純にカイ二乗検定をしたときに表面的には「要因Ａ」と自尊心水準に有意な連関が出ても、じつは「要因Ａ」と連関のある、隠された「要因Ｂ」が自尊心に影響する場合もある。Rosenbergは、「要因Ｂ」を統制し標準化された「要因Ａ」と自尊心の連関をみると、もはや連関は有意にならないことがあることを、他のパラメータを導入することで、たえず確認している。たとえば、Rosenberg の結果（Rosenberg のTABLE １，p.40）では、「社会階層」と自尊心水準の連関は表面的には有意だった。しかし、「社会階層」は「父親との親密さ」という要因と有意な連関があった。そこで「父親との親密さ」の要因を統制して自尊心との連関を見ていくと、「社会階層」と自尊心水準の連関は有意ではなくなった。

Rosenberg は、大規模データによる研究をした理由は、このような「標準化」（standardization）を可能にするためでもあったと述べている。

2）自尊心に影響する要因

Rosenbergは、研究の結果、最終的に自尊心と有意な連関がみられ、自尊心の形成に影響している要因が何だったかを明らかにした。検討した要因は、すべて自尊心水準の「高・中・低」（High－Medium－Low）とのクロス表のかたちで整理されている。

表3.　自尊心水準の有意な形成要因（Rosenberg, 1965の結果を整理したもの）

◎有意な関連が有る要因	●有意な関連が無い要因 △割合の差が小さい要因
＜子どもへの母親と父親の関心＞ ◎父親との親密さ（男児） ◎自分（子）の友だちを母親が知っているか ◎自分（子）の友だちを父親が知っているか ◎母親が子どもの友だちの名前を言えるか ◎父親が子どもの友だちの名前を言えるか ◎悪い成績の通知表を持ってきたときの母親の反応 ◎悪い成績の通知表を持ってきたときの父親の反応 ◎（子からみた）夕食時の家族の会話への参加度 ◎（子からみた）子どもの意見への家族の関心度 ◎総合測度：「子どもへの関心」	＜家庭の社会的な背景＞ ● 社会階層‡ ● 父親の現在の職業 ● 宗教‡ ● 子どもの頃の差別経験 ● 人種・民族‡ △ 親の離婚・別居・死別等 ● 母の離婚時の年齢 ● 父と死別時の母の年齢 ● 離婚した母の再婚の有無 ● 死別した母の再婚の有無 ● 親の死別後の子の養子 ● 親の死亡・離婚・再婚時の子の年齢 ● きょうだいの有無（一人っ子） ● 出生順位 ● きょうだいの人数

●「有意な連関がない要因」には、‡「他の要因を統制すると連関がなくなる要因」を含む。
△「差異が小さい要因」は、統計的には有意でも、Rosenberg が条件間の差異が小さいことを強調した要因。

Rosenbergの結果を整理してみると、自尊心と有意な連関のある要因がどのようなものであるか一目瞭然である（表３）。

「社会的階層」、「宗教」、「親の婚姻関係」などの社会的背景も、「出生順位」、「きょうだいの人数」も、自尊心水準とは関係がなかった。

有意な連関があった要因は、「子どもへの親の関心」としてまとめることができる。

Ⅳ　「親から関心を持たれていると感じる」ことの重要性

彼の結果は、すべて表のかたちで示されており、自尊心水準と要因のクロス表は、たとえば「３×５」の表など一目では内容がつかみにくいものが多い。そこで、表のデータからグラフを作成することにした。自尊心水準との関係がわかりやすいように、高自尊心群と低自尊心群の比較にして、

中程度の自尊心群の結果はグラフには含めていない。もともとのデータは、Rosenberg（1965）を参照してほしい。

グラフからは、子どもの自尊心を形成する要因として「親の関心」がどれだけ重要だったかがわかる。

もう一つ重要なのは、母親の影響は父親の影響よりもずっと大きいことである。

主な結果を、順次見ていくことにする。

⑴　「子どもの友だちをどれだけ知っているか」

「５・６年生のころ、お母さんはあなたの友だちをどれくらい知っていましたか？」という質問である。子どもに注意を向けているほど、わが子の友だちにどんな子がいるのかを知っているはずである。全員を知っているというのは、よほど子どもに関心を向けている場合である。

自分の友だちを母親は全員知っていたと思える子どもには、高い自尊心水準の子どもたちが多かった。「まったく、またはほとんど知らない」のは「無関心」のあらわれである。自分が関心を持たれていないと感じる子どもたちでは、とくに低い自尊心の割合が高い。高い自尊心の子どもの割合のおよそ倍である。

「５・６年生のころ、お父さんはあなたの友だちをどれくらい知っていましたか？」という質問の場合も結果は同様だった。しかし、父親の関心の効果よりも、母親の関心の効果の方が大きい。とくに「無関心」の影響については、高い自尊心の割合と低い自尊心の割合の差は、父親の場合よりも母親の方が大きくあらわれている。差だけをみれば、母親の方は父親の２倍以上である。

「無関心」が最悪の影響を与えることを結果は示していた。

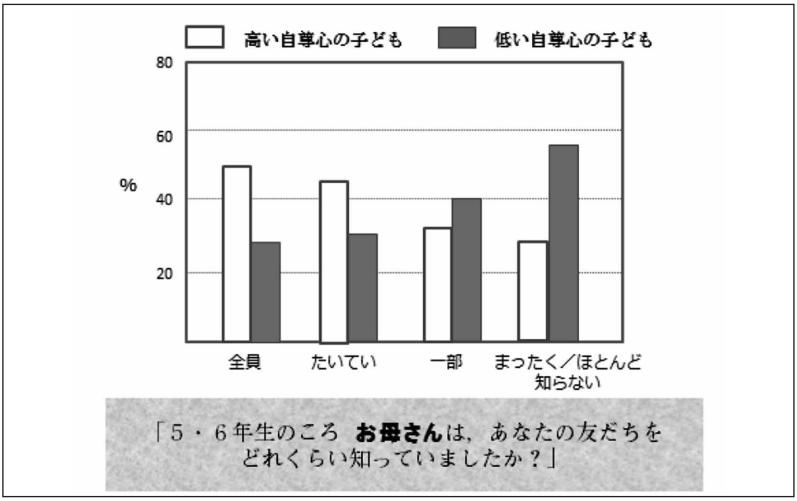

図１．子どもの友だちを「母親」が知っている程度と自尊心の関係
Rosenberg, (1965)の表から作図

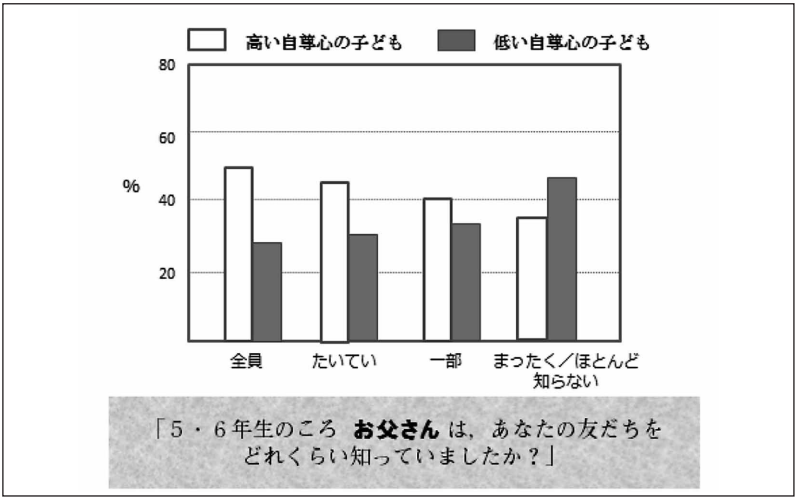

図２．子どもの友だちを「父親」が知っている程度と自尊心の関係
Rosenberg, (1965)の表から作図

⑵　悪い成績の通知表をもってきたときの親の反応

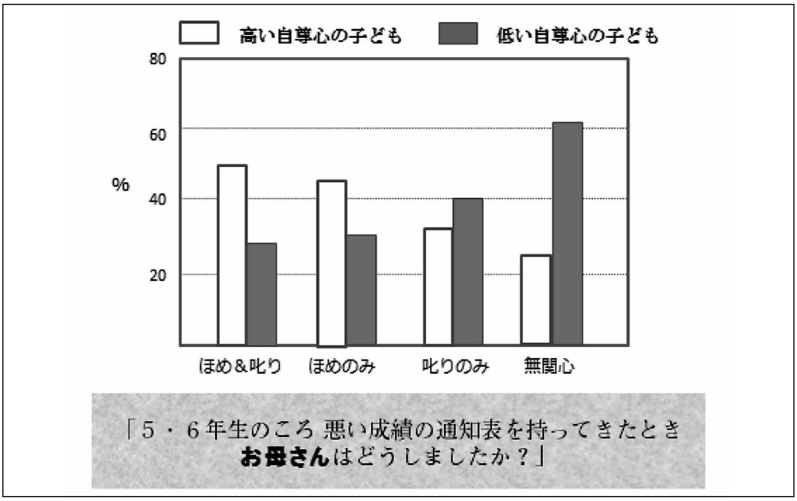

図３．悪い成績の通知表を持ってきたときの「母親」の反応と
子どもの自尊心水準の関係：Rosenberg,（1965）の表から作図

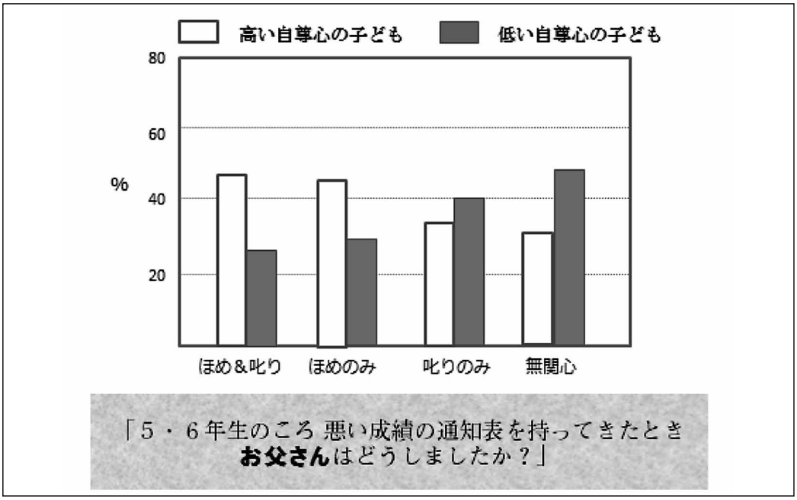

図４．悪い成績の通知表を持ってきたときの「父親」の反応と
子どもの自尊心水準の関係：Rosenberg,（1965）の表から作図

子どもへの関心と自尊心が密接に関連していることを示す、もう一つの結果は、「５・６年生のころ、悪い成績の通知表を持ってきたとき、お母さん（お父さん）はどうしましたか？」という質問への回答である。

一般には「ほめて育てろ」などというけれど、「ほめのみ」の母親群で高い自尊心の割合が最も高くなり低い自尊心の割合が最も低くなるわけではなかった。高い自尊心の子どもの割合が最も高く、低い自尊心の割合が最も低くなるのは、「ほめ＆叱り」群の母親の場合である。

「無関心」群は最悪で、「叱りのみ」の母親群よりも低い自尊心の子の割合が高かった。

なぜ、「ほめのみ」よりも「ほめ＆叱り」が子どもの自尊心を育てるのだろうか。

「ほめのみ」あるいは「叱りのみ」は、子どもを十分に見ていなくても、表面的に目についたことをほめ、あるいは叱ることができる。「ほめ＆叱り」となると、子どもに関心を向けてよく見ていないと肝心な点を対比的にほめ、叱ることは難しい。

子どもは「ほめ」や「叱り」という表面的な強化に反応しているのではない。その底にある「親の関心」に反応しているといえる。無関心はただ叱られるだけよりも、自らの価値がないと感じさせる結果になる。

父親の場合も、「ほめ＆叱り」群で子どもの自尊心は最も高くなった。また、「無関心」群で、低い自尊心の子どもの割合が最も高かった。しかし、父親の反応の影響は、母親よりも小さかった。これは「友だちを知っているか」どうかの場合と同様だった。子どもへの関心の影響は、父親よりも母親の方が一貫して大きい。

⑶　総合指標：「子どもへの関心」

Rosenbergは、最終的に「子どもへの関心」（Interest in the Child）という単一化された「総合測度」を設けている。「子どもの友だちを知っているか」、「悪い成績をとってきたときの反応」、「夕食時の家族の会話への参加

度」の３つを考慮した指標である。

３つのうち、どれか１つでも子どもへの無関心のサインがみられるかどうかによって、「子どもへの関心」の有無が定義された。「関心のサインの欠如がまったくない」親では、高い自尊心の子どもの割合は、低い自尊心の子どもの２倍近かった。「関心の欠如のサインが３つのうち１つでもある」親では、低い自尊心の子どもの割合は、高い自尊心の子の1.5倍くらいになった。親の関心のサインが１つでもないだけで、自尊心への影響が大きい。

子どもは、親の無関心に敏感である。

Rosenbergは、子どもの自尊心を形成する最大の要因は、基本的に「親の子に対する関心」であることを強調したのである。

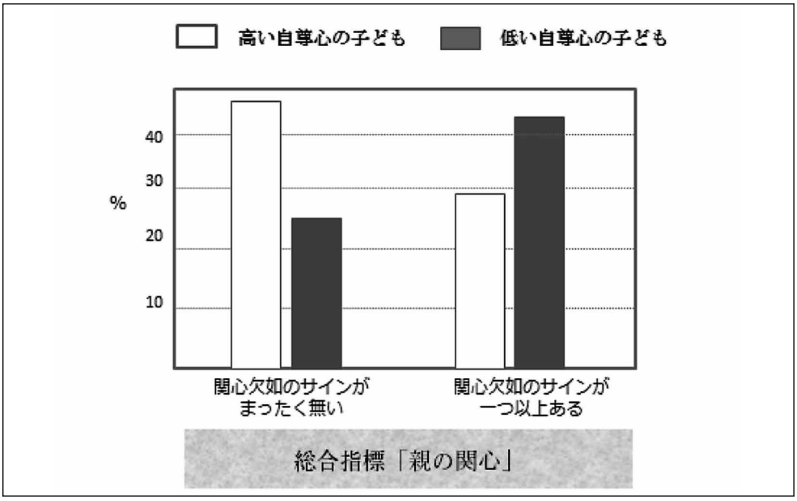

図５．「親の関心」の欠如を示すサインの有無と子どもの自尊心水準
Rosenberg,（1965）の表から作図

V　総合考察

Rosenbergは、自尊心の形成要因ほどのウェイトではないけれど、自尊心が生みだす問題についても検討を行っている。「不安」（心身症的な兆候の訴えの多さなど）、「対人態度と行動」（批判に敏感で自発的に発言しないか、シャイネスなど）、「ハイスクール共同体への参加度とリーダーシップ」（クラブへの参加や役員経験など）、「国内的・国際的な社会問題への関心」、「職業上の志向」（競争の多い仕事につきたいかなど）、「自分の特性やスキルの価値づけ」（よい生徒であることを大事にするかなど）その他である。結果について詳しく立ち入るスペースはないが、自尊心の形成要因と自尊心の影響についての彼の包括的な研究は、それ以後の自尊心研究の大枠をつくったものだといえる。

Coopersmith（1967）も、実験法も用いて包括的な自尊心研究を行ったが、基本的にはRosenberg（1965）の追試研究である。とくに「親の関心」については同じような意味をもつ質問を親に行って、同じような意味の結果を得ている。

たとえば、「子どもの問題に親が関心を示すと、子どもはうれしく感じて望ましい行動をすると思いますか？」という質問に対して肯定する親ほど、高い自尊心の子どもの割合が高くなる。ただし、Coopersmith の質問の仕方は、あまりに社会的望ましさのバイアスを受けやすい表現で、低い自尊心の子どもの親でも80％近くがこの質問に肯定的な反応をしてしまう。高い自尊心の子どもの親では100％の肯定である。同じ親の関心をみるのにも、Rosenbergのような「子どもの友だちを知っているか」、「悪い成績の通知表を持ってきたときどうするか」のような具体的な行動をみていく質問の工夫が望ましいだろう。

「平手打ちする」親よりも、「無関心」な親の方がゆるせない

Rosenbergの結果もCoopersmithの結果も、1960年代のアメリカの青少年の結果である。50年経った現代の日本あるいは他の国には適用できない結

果なのだろうか。

May-Chahal & Cawson（2005）の調査結果は、近年の英国の青年でも親の関心は子どもにとって大きな意味を持っていることを示している。

May-Chahalの研究は、世界の虐待調査の中でも虐待発生率について最も信頼できる推計値を具体的な行為ごとに提供してくれるものである。調査は、英国全体の青年（18～24歳）のサンプリングにもとづく調査で、選択された個人に直接に面接調査を依頼し、実行した。結果的に、2,869人（男性1,234人、女性1,635人）に直接に面接が行われた。

調査からは、かつてない詳しさで虐待の経験率が具体的な行為ごとに明らかにされている。しかし、虐待にかかわる結果は、別に紹介している（仁平，2012）ので、ここではもう一つの重要な意味を持つ結果について説明をする。

調査には、「子どもに対する親のしつけ上の罰として、次のような行為はどれくらいゆるされないと思うか」という質問が含まれていた。行為は、「平手打ちする」、「こぶしで殴る」、「食事をさせない」、「沈黙（無視・話し

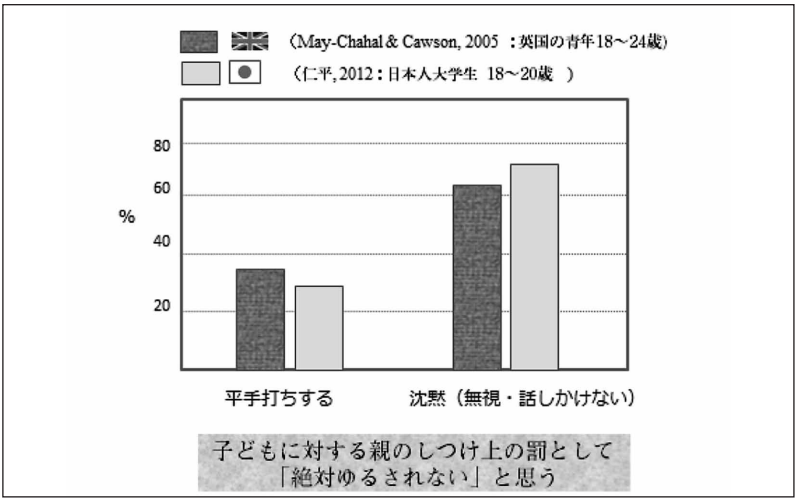

図６．「親の関心」の欠如は、子どもにとって平手打ちより辛い

かけない)」などである。親の行為は、青年によって“たいていゆるされる”、“ときにはゆるされる”、“絶対ゆるされない”に分類された。

当然ながら“こぶしで殴る”のは、“絶対ゆるされない”と判断される割合が高い（96％）。しかし、“無視（話しかけない）”が絶対ゆるされないという判断（62％）は、平手打ちが絶対ゆるされないという割合（37％）よりもずっと高い。子どもにとって親の無関心がいかに苦痛かを示している結果である（図６）。

「しつけ」の14項目だけについて、同様な調査を日本人大学生に行った（仁平, 2012.未発表）。結果は、英国人青年たちと、ほとんど同様だった。親の無関心は、現代の日本でも英国でも、子どもには「平手打ち」より倍もゆるせない。

母親の影響の大きさ

もう一点、最後にあらためて指摘しなければならないのは、子どもにとって父親よりも母親の影響がはるかに大きいことである。

とくに母親でも、無関心の影響は大きい。「子どもの友だちを知っているか」、「悪い成績の通知表を持ってきたときどうするか」、そのいずれでも母親の「無関心」は父親のそれより、はるかに大きなマイナスの影響となってあらわれた。

Tomoda et al.（2011）も、親の言葉による虐待が脳に与える影響は母親で大きいことを明らかにした。現在平均21歳の男女について、子どもの頃に受けた言葉による虐待と大脳の聴覚野の一部、左上側頭回（22野）灰白質の容積（Gray matter volume: GMV ）との関係が調べられた。その結果、子どもの頃に言葉による虐待を受けた程度が大きいほど、GMVが増大することが明らかになった。しかも、この相関は母親の方が明確だったのである。

「自尊感情」をどうするか

最後に、自尊感情という表現をどうするかという問題がある。

結論としては、Rosenbergが言う意味でのself-esteemの訳語であるなら、「自尊心」と表現した方がよいだろう。現実に『心理測定尺度集』（山本編，2001）の日本訳「自尊感情尺度」を使っていても、「自尊心」としている研究（長谷川ほか，2015）もある。

【引用文献】

Coopersmith, S.（1967）. *The antecedents of self-esteem*. W. H. Freeman and Company.

Coopersmith, S.（1972）.自尊心と家庭環境.（岡本奎六訳）『別冊　サイエンス：心理学特集　不安の分析』，113–120.（Coopersmith, S.（1968）. Studies in self-esteem *Scientific American*, 218, 99–106.）

長谷川孝治・相馬敏彦・木村昌紀・清水健司（2015）自尊心と安心さがしが社会的拒絶への対処行動に及ぼす影響．日本心理学会第79会大会発表論文集，171.

堀洋道監修・山本眞理子編（2001）心理測定尺度集Ⅰ―人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉．サイエンス社.

James, W.（1890）. *The Principles of Psychology*. Vol.1. New York: Holt.

May-Chahal, C. & Cawson, P.（2005）. Measuring child maltreatment in the United Kingdom : A study of the prevalence of child abuse and neglect. *Child Abuse & Neglect*, 29, 969–984.

仁平義明（2002）子どもの自尊心とお父さん．仁平義明『ほんとうのお父さんになるための15章―父と子の発達心理学―』ブレーン出版，69–73.

仁平義明（2012）子どもの虐待と心の回復（リジリエンス）の指標．白鷗大学教育学部論集，26，363–390.

Rosenberg, M.（1962）. The association between self-esteem and anxiety. *Journal of Psychiatric Research*, 1, 135–152.

Rosenberg, M.（1965）. *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.

Rosenberg, M.（1979）. *Conceiving the Self*. Basic Books, Inc., Publishers.

Tomoda, A., Sheu, Y-S., Rabi, K., Suzuki, H. Navalta, C. N., Polcari, A., & Teicher, M. H.（2011）Exposure to parental verbal abuse is associated with increased gray matter volume in superior temporal gyrus. *NeuroImage*, 54, 280–286.

繁桝算男・四本裕子監修（2013）APA大辞典　培風館.

山本眞理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造．教育心理学研究，30，64–68.

【注】本論中の図の一部は、仁平（2002）によるものである。